

その叫び聲を聞くと、健兒は身輕に駈け着けて、
「通譯！何が大變なんだ？」
と聞く。

「お、日本少年……彼れを、彼れを。」

「亞刺比亞人が指す方を眺めた健兒は、

「うむ！成程これは大變だ。」

と叫んだ。

其處へ、エス老大佐が遣つて來た。

「健兒君、何か見えますか。」

「大佐！彼れを御覽なさい。」
「どれ、どれ。」

老大佐は健兒や亞刺比亞人が指す方を見るや、颯と顔色を變へた。
今しも來たれる方に當り、砂煙が盛んに起つて、數百人の駱駝隊
が、此方へ向つて全速力で進撃して來るのだ。

老大佐は太い嘆息して、

「回教徒だ——二百人は居らう。」

と絶望的の聲を放つた。

回教徒の進撃——その一言を聞くと、川瀬博士や剛助を始め他の

團員一同も此場へ馳せ集まつた。

一七 生？死？是れ天命

老大佐の言つた通り、この巨人岩を目蒐けて不意に襲來したのは約二百名ほどの回教徒であつた。

回教徒は、亞フリカの大砂漠を横行し、常に旅客を苦しめる暴徒である。

彼等の駱駝隊は、巨人岩より十丁程の處まで來るや、一齊に駱駝から下りて無法にも發砲し始めた。

其の行爲は、如何にも無法極まるものであるが、相手が暴徒であつて見れば、襲撃された人々が不幸で、これに對つて抗議を申込んだとて仕方がない。

此方の執るべき手段は、唯防禦の一事あるのみだ。

斯る事あるべしと知つて、此處まで一行を護衛して來た埃及兵は、これに對して勇敢に戰つた。敵の回教徒から比較すれば、二十分の一にも足らぬ小人數ながらも、巨人岩に立籠つたまゝ、此處の蔭、彼處の狭間に身を隠し勢鋭く戰つた。

此方は巨人岩に立籠つてゐるに引替へ、敵は砂漠のうちを進撃す

るのだから、見る見る間に七八人以上の死傷者を出した。

然し、回教徒の襲撃軍は、味方の小勢なのを知つてゐるので、頻頻として死傷者の續出するにも屈せず益々勢猛に突進して來た。

始めは岩の中腹に據つて、頑強に防戦した埃及兵も、猛烈なる敵の攻撃に堪へ兼ねて、ヂリヂリ岩の上に追ひ迫められて來た。其内に一人倒れ二人倒れて、七人の兵士は三人しか残らぬやうになつた。

川瀬博士は別として他の團員は、巨人岩見物に來たので始めから武器の用意などして來なかつたので、唯敵のなすが儘に任せるより

外はなかつた。團員は味方の兵士の斃れる毎に走り寄つて、銃を拾ひ上げては見たが、最早彈丸は一發も残つて居らぬので、其儘また銃を捨て、しまふのだ。

残つた三人の兵士も、遂ひに銃を擲つてしまつた、彈丸が無くなつたからである。斯うなつては一同捕虜か、虐殺か、運命の儘に任せるより外は無。

老大佐は、豪氣な英國の軍人だけに、

「實に残念だ！回教徒如き鼠輩の爲めに捕虜になるのは死すよりも苦痛である、我輩は茲に一挺のナイフを持つてゐるで、これで敵軍

へ飛込んで斬死にする！」

と血相變へて飛出さうとする。

「まあ、お待ちなさい！」

川瀬博士は慌て、引留めた。

「エス大佐！軍人としての貴官が御無念なのは重々御推察するですが、茲は徒らに犬死する處であるまいと思ふ、僕に少々思慮もあるから、暫く恥辱を忍んでいたゞき度い。」

「川瀬博士のお言葉は道理であるが、我輩は退職たりと雖も軍人ぢや！回教徒の爲めに捕虜になるのは忍びん。」

老大佐は無念の拳を打振りながら、

「英國軍人の恥辱を亞弗利加へ來てまで晒したくない、おなじく死すべき運命なら、飽くまでも軍人としての威權を保つて死に度く思ふ！健兒君は獨逸人と決闘までする勇氣のある日本少年だ、君も拙者と同感であらう。」

「無論です！」

健兒は勇しくも老大佐に賛同して、父の博士に向ひ、

「父様、僕はエス大佐と同感です、迎も遁れぬ運命なら、生か死か、僕はエス大佐と共に死を賭して彼等のうちへ斬込む覺悟です。」

と言ひ出した。

其れを傍で聞いてゐた從僕剛助は、何んとして黙してゐられやう。

「偉い！若様の御覺悟は實に見上げたもんです。手前は臺灣でお目にかゝつてお供を許していたゞいた時から、若様と生死を共にする氣でゐます、手前も御一緒に斬込み、同じ死ぬにしても手當り次第に敵の首つ玉に啖付いて死にます。」

と意氣軒昂。

老大佐は、健兒や剛助の勇氣に感入つた。

「さうだ！決死の覺悟して突進すれば、雲霞の如き大敵でも更に怖るゝ處はない！斯う言つて居る内には敵は益々肉迫するばかりだ、仕度がよくば直ちに斬つて出やう。」

「可！剛助續け！」

老大佐を真先に、健兒剛助の三人は、今や獅子奮迅の勢ひで、敵軍目蒐けて突進せんとした。

「待て！健兒ツ。」

川瀬博士は一喝して、三人の面前へ大手を廣げて立開かつた。

「お前達の勇氣は賞するに足るが、僅か三名で斬つて出るのは犬死

だぞ。それほど勇氣があるなら、暫く父の言葉に従つて時機を待て！斯う云ふ俺に深い計略があるから逸まつた事するなツ。」

再度までも川瀬博士から制止られては、エス大佐も其言を容れぬ譯には行かなかつた。

敵の回教徒の爲めに捕虜になるのは残念であるが、平素から尊敬してゐる川瀬博士と争つて犬死するのも考へものと思つて、突進する事だけは見合せた。

「いや是非がない！残念ながら茲は川瀬博士の御忠告に従はう。然し、博士も知らるゝ如く敵の回教徒は虐殺などは何んとも思つて居

らぬ野獸に均しき人間だ、貴下には彼等の手から美事に遁れ出づる計略がありますか。」

「或ひは虐殺されるかも知れませんが、我々に決死の勇氣さへあれば、如何なる敵の前でも怖るゝ事はありません。生か死か、兎も角運を天に任せて一計略めぐらせて見ませう。萬一、その場合に如何とも遁れ出づる方法がなければ敵と差違へて美事に死ぬのみです。」

「然うちや！死さへ覺悟して居れば何事も怖るゝには足らん、俺は川瀬博士の命令を奉せやう。」

老大佐は他の團員を顧つて、

「諸君は何う思はるゝか。」

と聞くのであつた。

他の團員も萬死の一生を頼みに、川瀬博士の意見に従ふ旨を答へた。

健兒も父の博士に任せると言つた。從僕剛助は何事も健兒任せであつた。

一八 骸骨で出来た道路

この時、川瀬博士は何んと思つたか、自分のピストルに二十發の

彈丸を込め、尙ほ健兒のピストルにも充分詰めさせた後、婦人中の尤も確かりしてゐる米國のジー夫人を差招いた。

「貴女にお願いがあるが聞いてくださるでせうな。」

「この際のことです。私達の生命の安危は博士にお任せ申したので、何んなりと御命令に従ひます。」

とジー夫人は憶するところなく言つた。

「それを伺つて安心しました。さて貴女にお頼みと云ふのは外でもない、この二挺のピストルの御保管を願ひ度いのです。」

「あの私にピストルを……」

この危急の場合、ジー夫人は何故に大事な武器を自分に預けるのか、鳥渡川瀬博士の意嚮が分らなかつた。

博士は簡単に説明した。

「如何に粗暴な敵でも、婦人に對しては手荒な取扱ひもしますまい、従つてその身體を檢めるやうな事もなからうと思ふから、このピストルは貴女に保管していたとき度いのです——また返して貰ふ場合があらうと思ひます。」

ジー夫人は、川瀬博士の用意周到なるには敬服した躰で、

「宜しうございます、このピストルは確かにお預りしました。そし

て、私は一刻も早くこのピストルが役に立つ折の來るを望みます。」
と言ひつゝ、受取る。

「何分嚴重に保管をお頼みますぞ。」

博士はジー夫人に念を押した上、残りの彈丸は、健兒にも分け、そのズボンの隠囊へ入れさせた。

この間に敵は大舉して巨人岩へ押寄せた。そして、一同が抵抗する氣のないのを見るや、まづ埃及人の三兵士を虐殺した。

回教徒は、英國人に使はれて、回教徒に抵抗し、時に回教徒を征伐する埃及兵士を何より憎悪んでゐたのである。

忽ちのうちに三人の埃及兵を虐殺した回教徒は、川瀬博士の豫想通り、團員中の男兒を、上衣を引剥いて嚴重に縛り上げてしまつた。

然し、健兒はまだ十六歳の少年であるからか、唯上衣を剥き取られた丈で、婦人の一行と一緒に縛りもせず、

「捕虜の跡から靜かに隨いて來い！」

と命令を下した。

婦人はさすがに身體を檢められず、何處までも川瀬博士の豫想通りであつた。

これで味方の手には、絶大の威力あるピストルが残つた——一挺は健兒のズボンの隱囊に、他の一挺はジー夫人の内懐に。

斯うして、川瀬博士に従僕剛助、エス大佐、アイ伯爵、ビー銀行員、其れに通譯の亞刺比亞人の他に、健兒と婦人連を全部捕虜にした回教徒は、埃及兵士を見も返へらず、直ちに駱駝に打乗り、亞弗利加の内地深く凱歌を上げて引返すのであつた。

そして回教徒は、砂漠の中を一直線に四十哩も進んで、眞白く縷を引いたやうに、砂漠の中についてゐる一條の通路に出で、猶も西へ西へと進むのであつた。

捕虜になつた一同の最も驚愕に打たれたのは、この白くなつて見える通路であつた。

近寄るに従つてよく見れば、砂漠のうちに一筋白く現はれてゐるのは、彼等の手に依つて虐殺された人の骸骨や、斃れた駱駝の骨が葬りもされずに捨てられたのが、幾百年の間積り積つて路が白くなる程になつたのだ。

あゝ、世にも怖るべき骸骨の路！それが、彼等回教徒の尤も武功を慢る凱旋道路である。

何千何萬とも數知れぬ、この多數の骸骨のうちには、未だ腐敗し

きれぬ人の死骸も横つてゐた。

それを踏み行く一行は、旋ては自分達も斯る悲惨な運命に陥るのではあるまいかと暗い心に囚はれた。殊に婦人連にその感が深く見受けられた。

この白骨の路へ合した時、川瀬博士は、自分の被つてゐた帽子を誤つて取落した振りして故意と捨てた。健兒は、早くも歸る時の道しるべだなと悟つて、見て見ぬ振りして居たのである。

更に五哩も進んだかと思ふ時分、一行は唯有る緑地へ達した。

砂漠の緑地は、旅行者にとつて唯一の慰めであり且つ生命である。

焼石と焼砂に掩はれた砂漠のうちに、此處ばかりは、緑の草木が森々と茂り合つて、その下蔭には潺々たる清水も湧いて居るのだ。陽も暮れかゝつたので、回教徒は今夜此處に一泊するらしかつた。

捕虜の一行をも駱駝から引下して、麵麩は僅かに小さな一片づゝしか與へなかつたが、清水だけは充分に飲ませてくれた。

この有様を見た川瀬博士は、

「今夜は殺すやうなことはあるまい！明日の朝になれば危険だから、何んでも今夜のうちに脱走しなければならん、健兒も剛助もそ

の意りで注意を怠るな。」

と敵に悟られぬやう、密かに呷き交すのであつた。

一九 我が生死此一舉にあり

夜は森々と更け渡つた。

緑の林頭を照す月は清く輝いて、日本で見ると少しも違はなかつたが、一度眼を放つて、緑林外の砂漠を眺めると、一望限りなき砂地は續いて、何んともなく物凄く感じられたのである。

野營に馴れた回教徒は、十四五名の監視を残したまゝ、何れも木

の根を枕に高射で眠込んでゐるが、捕虜となつた人々は何うして眠ることが出来るやうぞ。

殊に川瀬博士は、この團員一同の生命を預つてゐるのだから、敵の監視を油断させる爲め、故意と高射を掻いて能く寝入つた風を装つてはゐるが、心中には如何にして此處を遁れ出でやうかと、そればかり苦心してゐるのであつた。

その考へは健兒も變らなかつたのである。

父の博士を真似て、熟睡してゐるやうに見せかけてはゐるが、夜の更け行くに従つて其眼は益す冴ゆるばかり。

父の博士は小聲で呼んだ。

「健兒……健兒……」

「父様、何んです。」

と健兒もおなじく小聲で答へた。

「俺はこれから何んとか工風して此處から遁れやうと思つてゐる、

お前もその意りで油断してはならんぞ。」

「僕もそればかりを考へてゐるんです、父様、何か好い工風が浮びましたか。」

「いやまだ別に好い分別はない！敵は二百人餘りの大勢だ、愁ひの

事をすれば却つて死期を早めるやうなものだから、何か機會の來るのを待つより外はない。」

「夜が明けたらこの儘には捨て置かないでせう？」

「無論、虐殺されると知れてゐる。」

「ぢや、何うしても今夜のうちに此處から脱出しなければなりません。」

「その覺悟でゐろ！時に、剛助は起きてゐるか。」

さう言ふ博士の小聲がすると、

「旦那……手前は起きてゐます。」

と剛助は秘めき聲で答へた。

「何うだ？寝られるか。」

「明朝のことを思ふと中々寝られる處ちやありません。」

「然うだらう！誰しも同じ事だ。」

博士は頷いて、

「併し安心しろ！今夜のうちには必らず助けてやうから。」

「何か好いお考へがありますか、斯う云ふうちにも夜が明けては大變です。」

「まあ心配するな、夜が明けるまでにはまだ大分間がある。」

其儘話は絶えて、又もや博士が敵の油断を窺ふ高射は始まつた。斯る中に夜は次第に更け行きて、今は曉方近くなつた。其時、夜の砂漠を衝いて前方から二三の傳令らしい者が馳せ來つた。すると、眠りに就いてゐた回教徒は俄かに勿起きて、その傳令と二三語交へたが、仕度もそこく一同は駱駝に跨つて出發した。捕虜になつた一行には、唯十四五名の監視を附けた儘である。「何か事變が起つたと見える、何んだらう？」とは、捕虜一同の口から出る疑問であつた。

通譯の亞刺比亞人は、

「此處から五哩ほど先方で、回教徒と、埃及軍隊とが衝突したのです。」

と説明した。

川瀬博士が待ちに待つてゐた脱走の好機は斯くして遂ひに到來したのである。

これを聞くと健兒は直ぐに起上つたが、ジー夫人の側へ行つて、先刻預けたピストルを受取り、監視の回教徒に悟られぬやうに、靜かに父博士の背後へ廻つた。

そして、嚴重に縛された父の手にピストルを握らせて、その繩を

切るや、二人揃つて起上り様、

「こら！今こそ日本男兒の手並を見せてくれるぞッ。」

と言ひながら、監視者にピストルを差向けた。

音響はしないが、回教徒は見る間に七八人射落された。

然し、相手は無智の回教徒であるから、無煙無聲火薬で遣られてゐるとは氣注かう筈がない。並んでゐる同胞がバタバタ倒れるのを見て、徒らに狼狽するばかりである。

健兒親子が思ふ様射撃して、十二人まで射倒した時、始めて何やらを持つてゐて、その指されるものは血煙立つて殺されると覺つた

監視者は、奇怪なる叫びを上げて逃げ出した。

健兒が尙ほも逃げる奴を射撃して、二人まで射落した時、父の博士は手を上げて制した。

「我々のすることとを彼奴等は一種の魔法とでも思つてゐるらしいから、却つて本隊に報告させた方が、追撃を受ける恐れがないかも知れん。」

と注意したので、健兒は忌々しいとは思つたが、逃げ行く二人だけは見遁してやつた。

この間に、味方の縛られた者は、婦人連の手に依つて全部自由の

身となつたので、回教徒が残して逃げた駱駝に飛び乗り、一同は今日来た路を退却し始めた。

二〇 譽は高し日本少年

川瀬博士と健兒が、冒險的亞弗利加内地の旅を終つて、無事、英京倫敦に着いた時分には『日本の勇敢なる少年と其父の新火薬』と云ふ題で、英全國の各新聞雑誌は、健兒の亞弗利加に於ける勇敢な動作と、川瀬博士の新發明にかゝる無烟無聲火薬の偉大なる効力を盛んに書き立てぬはなかつた。

茲に父の博士と別れた健兒は、今、ケンブリッジ大學に這入つて勉強中である。

世界漫遊を終つた川瀬博士は、従僕剛助を連れて目出度く歸朝したが、更に第二の發明を完成すべく、房州鷹の島の研究所へ閉ぢ籠つた。

英國留學中の川瀬健兒が、再び父博士より「ハツメイデキタ」との快報に接するのは何時であらうか。

(完)

大正五年二月十日印刷
大正五年二月十五日發行

【定價拾五錢】

~~~~~  
著作權所有

———  
胃 險 奇 譚  
生 ？ 死 ？

著 者 俊 碩 劍 士

發 行 者 東 京 市 日 本 橋 區 松 若 町 四 番 地  
湯 淺 久 米 策

印 刷 者 東 京 市 神 田 區 松 住 町 五 番 地  
菅 井 十 一 郎

印 刷 所 硯 文 舍

發 行 所

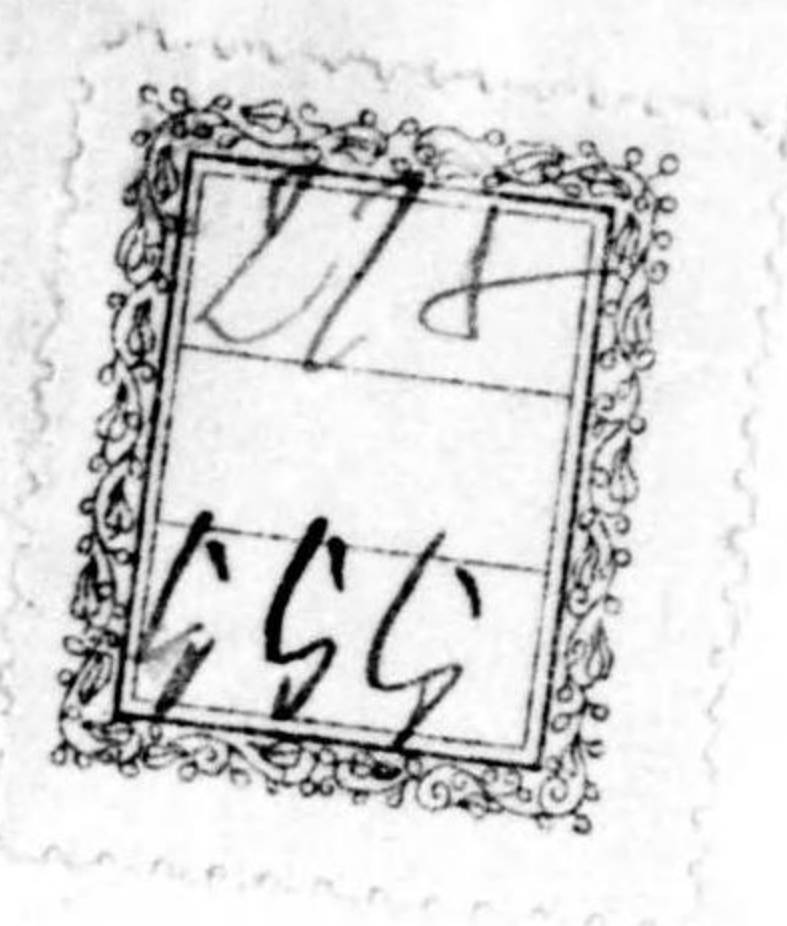
東 京 市 日 本 橋 區 若 松 町 四 番 地

春 江 堂 書 店  
電 話 花 四 八 六 二 番  
振 替 東 京 一 八 〇 六 番

書翰講習會編  
著作叢書

- |         |         |          |         |          |          |
|---------|---------|----------|---------|----------|----------|
| 1 書翰實習法 | 2 實業書翰文 | 3 實習はがき文 | 4 新編記事文 | 5 美文的候文  | 6 口語體書翰文 |
| 7 現代論文  | 8 大正祝祭文 | 9 日記文作法  | 10 少年文範 | 11 若々の書翰 | (以下追次發行) |

四六半載形布綴色繪金文入美裝  
各定價十二錢郵稅金四錢



終

